令和８年度 学力向上のための重点プラン【小学校】 新宿区立牛込仲之小学校

■ 学校の共通目標 【ＨＰ公開用･様式１・８年５月１８日】

授業作り	重点	・確かな学力の向上を図り、生きる力を育むという視点で学習活動を構想する。
環境作り		・教員間で学力向上に向けた方針の共有を図り、具体的な方策を検討し、実践する。

■ 学年の取組について

学年	学習状況の分析（各種調査から）	学校が取り組む目標（日常の授業の様子から）	目標達成のための取組
1学年		・正しい言葉遣いや返事などの基本的な学習規律が身に付くように指導する。 ・平仮名、片仮名、漢字の字形を整えて、正しい書き順で書けるようにする。また、書字の際の姿勢や正しい鉛筆の持ち方についても、身に付けられるよう指導する。 ・基本的な加減計算が定着できるように繰り返し指導する。 ・学習活動の中で、教師と子どもとの対話、友達同士の話し合いを行う時間を大切にし、協働的な学びの基礎が身に付くようにする。	①「はい。～です。」などの話型の掲示や「言葉の宝箱」などでのモデルの提示。教師が手本となり、正しい言語環境を作る。 ②学習ワークやノートは丁寧に目を通し、適切に評価する。また、児童の学習に取り組む姿勢については、その場で評価し、児童の自信につなげられるようにする。 ③基礎が身に付くように家庭と連携し、家庭学習の充実を図る。 ④１単位時間の中にペア活動を取り入れ、対話する経験を積み重ねる。
2学年		・新出漢字が増えるため、正しい筆順で丁寧に書けるように定着を図る。 ・長音、拗音、促音、撥音を正しく使えていない児童がいるため、正しく使えるように指導する。 ・文章を書く時や答えを書く時に、句読点の付け忘れや接続語の間違い、単位の付け忘れがないように指導する。 ・丁寧な話し方ができるよう言語指導を重ねる。 ・話を最後まで静かに聞く姿勢を身に付ける。	①デジタルドリルを活用し、漢字学習の習熟を図る。 ②ノートやワークシート等の誤字脱字を丁寧にチェックする。 ③授業だけでなく、学校生活の中で、正しい言葉使いや話し方、返事の仕方の指導を徹底する。発表するときは返事をし、「です」「ます」を意識する。 ④教室や机上を整え、話し手の目を見て話を聞くことができるよう指導する。
3学年	・書くことの正答率が他の領域に比べやや低く、目的や相手に応じた文章構成に課題がある。 ・思考・判断・表現の正答率が知識・技能を下回っており、考え方を言葉や図で説明する力に課題がある。また、数と計算の定着に個人差が見られる。	・定規を使って線を引く習慣がない児童が多く、今後、図形を描く際のコンパスなど道具の使い方についての指導が必要である。 ・自分の考えを、図や式、言葉を用いて論理的に説明し、表現し合おうとする態度を育てる。 ・既習の漢字や計算の定着を図り、基礎学力の向上を目指す。	①日々のノート指導で定規を使って線を引くように指導し、定規を使ってまっすぐな線を引けるようにする。 ②どの学習においても自分の考えをまとめる活動、書く活動を位置付け、図や言葉で説明する時間を確保する。 ③デジタルドリルを活用し、漢字や計算の反復練習をして定着させる。
4学年	・言語の知識、技能の習熟が比較的低く、既習漢字の定着と合わせて、語彙を獲得する必要がある。 ・図形に関する知識、技能の習熟が必要である。 ・算数の学習において、定着に個人差がある。個に応じた指導を要する。	・漢字の確実な定着に向けて指導する。 ・読書量を増やし、語彙力を向上させる。 ・自力解決の時間を授業で確保し、作図などの課題解決に繰り返し取り組む。 ・既習事項の習熟を図る時間を設定し、デジタルドリルに加えて復習プリントも活用し、個人差に対応した課題を提示し、指導する。	①デジタルドリルを活用し、漢字や計算の反復練習をして定着させる。 ②読書等の環境を整備し、時間を確保する。 ③自力解決の時間を設定する。 三角定規やコンパスなどの道具の使用に慣れるよう、使用頻度を増やす ④既習事項の習熟を図る時間を設定する。

5学年	・漢字の学習や計算、都道府県など学年相応の力が十分に定着していない児童が一定数いる。 ・調べたり、まとめたりする活動は得意な児童が多いが、調べたことから自分の考えや問いを見付けられる児童が少ない。 ・「聞くこと」を苦手にしている児童の割合が多い。	・繰り返し学習や自主学習などを活用して、基礎的な力が身に付くように粘り強く指導する。 ・国語や算数、理科、社会などの主要教科でも問いを見付けたり、自分の考えを深めたりできるような学習に取り組む。 ・対話的な学びや協働的な学習を通して、「聞く」力が身に付くよう学習形態を工夫する。	①既習内容~~学習~~を生かした宿題の設定や自主学習を計画する。 ②まとめ方や学習の学び方などが分かるようにする手引きを作成する。 ③デジタルドリルを活用する。 ④児童自身が問いを見付けられるような課題提示や導入を工夫する。 ⑤総合的な学習の時間に、百科事典の調べ方、引用や自分の意見の書き方の指導を行う。 ⑥学習者同士の対話を促すため、ペアやグループの活動を取り入れる。
6学年	・言語事項として、理解言語、表出言語共に学年相応の力が十分に定着していない児童が一定数いる。言語活動、特に、読解力と表現力の育成が必要である。 ・論理的な思考力、プログラミング的な思考力の育成に必要感を感じる。課題解決に向けて、課題を捉えたり、解法を予測したり、主体的に学びを調整したり（トライ＆エラー）する学び方の育成が必要である。 ・学力の定着度は二極化の傾向にある。A層、B層への発展的な課題の設定、C層、D層への個に応じた指導など、習熟度に合わせた学習内容、学習方法、学習材の工夫が必要である。 ・「聞くこと」を苦手にしている児童の割合が多い。考え方を深め、広げていくためには、互いの考えを「聴き合う」態度の涵養が必須である。	・問題把握、予想と見通し、自力解決、対話的な学び、評価と新たなめあての設定といった学習過程を、適切に位置付けた指導計画を作成する。 ・特に本校の研究課題である「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るため、自学、ペアによる交流、小グループによる対話、学級全体による討論など、単元目標と学習内容に準じて、適切に学習形態を設定する。 ・「対話的な学び」の前提となる学びとして、「自力解決」の場を大切にする。習熟度の差や学びのスタイルの違いに応じた支援、個別指導の充実を図る。 ・タブレット端末を活用し、数熟度に応じた学習を工夫する。デジタルドリルの活用をはじめ、C層、D層の児童に対足しては、スモールステップによる学習、課題の効果的な可視化を推進する。 ・「対話的な学び」の基盤として、「聴き合い」の指導に重点を置く。発言者の意図や発言内容の良さを見出そうとする態度を身に付けられるよう、指導・支援を行う。 ・中学校への進学を見据え、さらに学力の向上を図れるようにする。算数科においては論理的な思考力、国語科においては表現力の向上を図る。	①学習過程を工夫した単元計画を作成する。 ②自力解決を支援するための、指導の個別化を充実させる。 ③興味・関心や習熟度に応じるため~~の~~、タブレット端末の活用を通して、学習の個性化の充実を図る。 ④学習者同士の対話を促すための、協働的な学びやグループ活動等を意図的に設定(日常化)する。 ⑤指導者との対話を促すための、受容的な姿勢と効果的な声かけを行う。 ⑥学習材との対話を促すための、支援を工夫（つまずきの予測と手立て）する。 ⑦聴き合いを促すための、学習形態の工夫やワークシート等学習材を開発（UD化）する。 ⑧算数科における学年のまとめとして文章題を設定する。 ⑨習熟度に応じた難易度の設定等、個別最適化の充実を図る。 ⑩国語科における、スピーチ、プレゼンテーションの場面を設定する。